

ボーヴォワールの回想録における語りの変遷について

伊ヶ崎 泰枝

はじめに

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、48歳で回想録『娘時代』の執筆に着手した。1958年に刊行されたこの作品は好評を博し、続けて1960年に『女ざかり』、1963年に『或る戦後』を出版した。その後、1972年に『決算のとき』、1981年に『別れの儀式』をそれぞれ約10年の月日を経過して上梓した。

『娘時代』は生まれた年の1908年から自立の1929年までの21年間、『女ざかり』は1929年から終戦の1944年、『或る戦後』は戦後の1944年からアルジェリア戦争の終結である1962年までが年代順で描かれている。この3巻の回想録を通して、幼年時代、思春期、サルトルとの出会い、教師生活、旅行、著作、政治活動について語っている。ところが、『決算のとき』では年代順の語りは放棄され、1962年から1972年までの10年間で主題別に扱われている。そして、一旦放棄された年代順の語りは、『別れの儀式』では、1970年から伴侶サルトルの死である1980年までの11年間の記録に再び選択されている。このように、ボーヴォワールの一連の回想録では語りの方が変遷を見せていることが分かる。

ところで、『娘時代』の最終部でのサルトルとの邂逅から『女ざかり』にかけて始まる一人称複数「私たち」の語りは、最後の巻である『別れの儀式』まで一見強固で揺るぎないものに見える。しかしながら、その間、ボーヴォワールとサルトルの実際の繋がりが不変であったとは言えないと思われる。本論文では、回想録の語りの変遷を追いながら、ボーヴォワールの語りの方角の選択の意図を論じて行きたい。

1. 『娘時代』、『女ざかり』、『或る戦後』における年代順の語り

「自分の一生が細大もらさず巨大な録音テープに記録されていて、いつかは私は過去を残らず声に再生するのだ」(FC II, p. 128)と考えていたと語るボーヴォワールは、1956年10月に、以前からの計画であった幼年時代の回想録に着手し、1958年3月までの18ヶ月を執筆に費やす。

幼少期から青年期までの成長が描かれた『娘時代』を特徴付けているのは、その小説的統一性である。二十歳のヒロインが最後に勝ち取る自由に向けて、サルトル

との出会い、親友ザザの死が自己形成小説のように明白な意味を持って組み込まれている。第三部の終わりは主人公の親友ザザの運命に対する決意で終わっている。

私は、彼女の中で生命が死に打ち勝つよう自分の力の限り闘おうと心に決めていた。

J'étais décidée à lutter de toutes mes forces pour qu'en elle la vie l'emportât sur la mort (*MJFR*, p. 392).

そして、最終部の終わりは、同じ« mort »が結句 *clausule* に使用されている。

私たちは待ち伏せている泥まみれの運命に対して共に闘ってきた。ザザの死を代償として私は自分の自由を勝ち得たのだ、と私は長い間考えた。

Ensemble nous avons lutté contre le destin fangeux qui nous guettait et j'ai pensé longtemps que j'avais payé ma liberté de sa mort (*MJFR*, p. 503).

このように、成年となることがその目標である幼少期、思春期特有の上昇的流れによる小説的な構成が見られる。他の巻にあるような読者との読書契約 *contrat de lecture*¹⁾ や、統計などの資料、注も見当たらない。

続く『女ざかり』より、語り手とサルトルからなる一人称複数「私たち」の語りが始まる。エリアーヌ・ルカルム・タボーヌも指摘しているように、『女ざかり』以降の巻は「夫婦の回想録」²⁾の観を呈している。『女ざかり』の最初の方の部分で、この世界的に有名な二人の作家に関する伝説的なくだりがある。

僕たちの恋は必然的なものだ。だが、偶然の恋も知る必要がある、とお得意の言葉を使いながら彼は私に説明した。

Entre nous, m'expliquait-il en utilisant un vocabulaire qui lui était cher, il s'agit d'un amour nécessaire : il convient que nous connaissions aussi des amours contingentes (*FA*, p. 30).

というわけで、二人は「二年間の契約を結び」、「同じ星の下に生まれた双生児」という表現を用いながら、『女ざかり』の語り手は、強固な一人称複数「私たち」の語りをスタートさせる。

続いて、「我々のシステム」と彼らの呼ぶやり方は『或る戦後』でも展開されている。同書のエピローグにおいても、次のように語り手は断言している。

私の人生には確かな成功があった。サルトルとの私の関係である。30年以上の間、私たちが反目した状態で眠りに入った事は一晩しかない。

Il y a eu dans ma vie une réussite certaine : mes rapports avec Sartre. En plus de trente ans nous ne nous sommes endormis qu'un seul soir désunis (*FC II*, p. 489).

この「一晚」についての詳細は明かされておらず、謎めいた記述となっている。そして、『或る戦後』の語り手は、彼女自身と伴侶サルトルの二人が、世界を把握するのに同じ道具、同じ図式、同じ鍵を用いることを明言しており、一人称複数の語りの根拠を示している。

ところで、語り手の判断、すなわち自己検閲によって、多くの事実が書き落とされることにも言及しておきたい。サルトルの教え子であるポストとボーヴォワールとの関係他いくつかの「偶然の」恋愛、元教え子達との同性愛的な関係、そして、サルトルの多くの女性関係³⁾が書き落とされた要素の主なものとして挙げられる。また、親しい人々への不満、とりわけ妹やオルガへの苛立ちや厳しい批判は書簡には見受けられるが⁴⁾、回想録の中では二人を賞賛する以外の表現は見当たらない。このように、『女ざかり』、『或る戦後』は、ボーヴォワールと伴侶サルトルという著名な二人を巡る公的な色合いを帯びた回想録となっており、サルトルもこれに異を唱えてはいない。

さて、『娘時代』、『女ざかり』、『或る戦後』の年代順の語りの中で、je-narré（語られる私、すなわちヒロイン）は成長し、変化していく。とりわけ、『娘時代』の中で、je-narrant（語りつつある私、すなわち語り手）と、18歳のje-narréとの隔たりは大きい。

頭を枕にのせると、涙がこみ上げてきた。「泣いている。つまり恋をしているんだわ」とうっとり私は自分に言った。17歳。お年頃だったのである。

La tête sur mon oreiller, des larmes me vinrent aux yeux. « Je pleure, donc j'aime », me dis-je avec ravissement. Dix-sept ans : j'avais l'âge (MJFR, p. 239).

どのくらいの期間？ 3年4年？ 18歳にはこれらの年月は長いものだ

Combien de temps ? trois ans, quatre ans ? c'est long quand on a dix-huit ans (MJFR, p. 292).

このような例では、je-narrantは神の視点から10代のje-narréを見下ろしており、一種の「焦点化ゼロ」⁵⁾が見出される。

続いて『女ざかり』の中でもje-narréは段階を追って変化している。語り手je-narrantは、時折、無名の時代の二人の「馬のように頑健で陽気な性質」(FA, p. 26)にノスタルジックな視線を投げかけたり、「何とあの頃の私たちには時間があったことだろう！」(FA, p. 234)と介入したりする。

ところが、1963年に刊行された『或る戦後』は、戦後の1944年から1962年までの時間を扱っており、同書の第8章において、je-narréは回想録の第一巻『娘時代』

の執筆に着手する。第 11 章の冒頭では『女ざかり』の出版と反響を語っている。そして、『或る戦後』の最終章ではやがて同書となる原稿を執筆している 1961 年の冬が語られる。

私は回想録の 1957 年から 60 年までの時期に書き進んでいたが、その時期の厭わしい顛末は、この厭わしい冬とあまりにもよく照応していた。

Moi, j'en arrivais aux années 57-60 et l'histoire de cette époque, abominable, ne s'accordait que trop avec cet abominable hiver (FC II, p. 443).

したがって、これら『娘時代』、『女ざかり』、『或る戦後』の三作品の年代順の語りを通して、『或る戦後』の最終部で je-narré は『娘時代』の執筆に取り掛かり、『女ざかり』、『或る戦後』となる筈の原稿の執筆を続け、je-narrant と合流する。

この三作品の中で展開される je-narré の成長と、一人称複数「私たち」の語りの形成、そして je-narré の je-narrant との合流の動きは、年代順という形式と切っても切れない関係にある。『或る戦後』の中の、間奏曲 *intermède* と名付けられた空間の中で、なぜ他の構成を選ばずに、年代順に書くことにしたのかについてボーヴォワールが見解を述べている部分がある。少し長くなるが引用する。

なぜ私は他の構成を選ばずに、年代順に書く事にしたのか。私はその点を考え、迷った。しかし、私の人生において何よりも第一に問題になるのは時の経過である。私は年をとる。世界は変化する。私と世界の関係も変わる。他者と、私自身の変貌、円熟、取り返しのつかない劣化を示すこと、これ以上私にとって重要なことはない。

[...] pourquoi me suis-je asservie à l'ordre chronologique au lieu de choisir une autre construction ? J'y ai réfléchi, j'ai hésité. Mais ce qui compte avant tout dans ma vie, c'est que le temps coule ; je vieillis, le monde change, mon rapport avec lui varie ; montrer les transformations, les mûrissements, les irréversibles dégradations des autres et de moi-même, rien ne m'importe davantage (FC I, pp. 375-376).

このように、時の流れにおける、自身と周囲の変化を描き出す事の重要性を挙げている。je-narré の成長と、一人称複数「私たち」の語りの形成、そして je-narré と je-narrant との合流は、ボーヴォワールが最重要と考える自身の成長と変化を表しているに他ならない。

2. 『決算のとき』における語りの変化

さて、『或る戦後』の刊行からほぼ 10 年の年月を経た『決算のとき』の執筆の理

由は、以下のように述べられている。

それに、私が回想録の筆をおいてから 10 年の月日が経過したので、語るべきこともいくつもある。

D'autre part, dix années se sont écoulées depuis le moment où j'ai arrêté mon récit : j'ai certaines choses à raconter (*TCF*, p. 9).

この巻『決算のとき』では、ボーヴォワールは年代順の語りを放棄し、テーマ別の章立てを採用している。『決算のとき』の語り手は、『或る戦後』の刊行から過ぎた 10 年について、何も変わらなかったことを強調している。

どのような公的な出来事も私的な出来事も私の状況に深い変化は与えなかった。私は変わらなかった。(…) 私はもはや一つの目標に向かって進んでいるという感じはせず、ただ抗しがたく死に向かって滑って行く感じがする。

Mais aucun événement public ni privé n'a profondément modifié ma situation : je n'ai pas changé. [...] Je n'ai plus l'impression de me diriger vers un but mais seulement de glisser inéluctablement vers ma tombe (*TCF*, p. 10).

同書の第 1 章においても、自分が変わっていない事を繰り返している。

『或る戦後』を書き上げてから流れた十年の歳月を考えると、まず気づくことは、自分が年をとったという感じがしないことである。(…) 私の生活は 1962 年以来ほとんど変わらなかった。

La première chose qui me frappe, si je considère les dix années qui se sont écoulées depuis que j'ai achevé *La Force des choses*, c'est que je n'ai pas l'impression d'avoir vieilli. [...] Ma vie n'a guère changé depuis 1962 (*TCF*, pp. 47-48).

ところで、『或る戦後』の最終部で je-narré と je-narrant との合流がなされていることについて先ほど言及した。『決算のとき』の語り手は、je-narré と je-narrant との間に差異を認めない。すなわち、このようなテーマ別の章立ての理由の一つとして、je-narré と je-narrant との間に違いがない以上、自身の成長・変化の歩みを追うのに適していると思われる年代順の語りを採用する必要がないことが推測される。また、『決算のとき』の序文においては、年代順の不都合な点についても見解が述べられている。

これまでの回想録では、私は年代順に述べる方法を採用したが、その不都合な点を知らないわけではない。つまり、読者はいつまでも付随的な前置きしか読んでいないという印象を持つのだ。

Dans les volumes précédents, j'ai adopté un ordre chronologique. J'en connais les inconvénients. Le lecteur a l'impression qu'on ne lui livre jamais que l'accessoire des préambules (*TCF*, p. 9).

このように、年代順の語り、読者に本質的な部分を次の頁に期待させながらも、結局何の帰結ももたらさない方法であることを述べている。64歳のボーヴォワールは、「人生というこの奇妙なオブジェ」(*TCF*, p. 9)を異なる方法で捉え直そうと試みる。それゆえ、『決算のとき』の最初の章では、伝統的な回想録に逆らって、「私、主体とその歴史とのこの必然的な一致」(*TCF*, p. 12)という部分から問い直されている。「私はパリに生まれた」*« Je suis née à Paris »*という単純な表現ですら問題を提起せずにはいない。女、フランス人、経済的に余裕のないブルジョワ階級出身といった社会的構造によって自身を説明しており、書名『決算のとき』*Tout compte fait*と対応している⁶⁾。

他方、語り手はこの10年の大きな出来事として、後に養女に迎えることになるシルヴィー・ル・ボンとの出会いを語っている。「私が彼女の生活に入り込んでいるように、彼女は私の生活すべてにかかわっている」(*TCF*, p. 92)と述べ、語り手の生活におけるシルヴィーの重要さを強調している。そして、例えば、旅行について述べた第4章では次のような記述が見受けられる。

今では、私の関心を引く誰か、たいていはサルトル、時々はシルヴィーと私が経験したことを分かち合う方が、ずっと楽しい。続くページで、私は「私」あるいは「私たち」と区別せずに言うが、実際少しの間離れる時間を除けば私は常に誰かと一緒にいた。

Aujourd'hui, je préfère de loin partager mes expériences avec quelqu'un qui me tient à cœur : en général Sartre, parfois Sylvie. Dans les pages suivantes je dis indifféremment *je* ou *nous* ; mais en effet, sauf pendant de brefs moments, j'étais toujours accompagnée (*TCF*, p. 294).

このように、一人称複数「私たち」の中身が、もはや語り手とサルトルの組み合わせばかりではないことが示唆されている。

さて、『決算のとき』の語り手は、サルトルの周辺の女性、とりわけアルレット・エルカウムをサルトルが養女に迎えた件については沈黙を守っている。リリアーナ・シエジェル証言によると、1960年当時、サルトルの周辺には、ボーヴォワールの他に、ワンダ・コザキエヴィッチ、ミシェル・ヴィアン、アルレット・エルカウム、エヴリーヌ・レイの4人の女性がおおり、リリアーナ・シエジェルが5人目の女性となった。1964年にアルレット・エルカウムが養女に迎えられた件で、リリアーナ・シエジェルは大変なショックを受けたことを証言している⁷⁾。

ところで、サルトルの養女となったアルレット・エルカウムとボーヴォワールと

の確執については多くの証言がある。とりわけ、サルトルの死後、法定相続人であるアルレット・エルカイク・サルトルとボーヴォワールとの間に、サルトルの遺品や『別れの儀式』刊行を巡って見解の相違が露呈したことは広く知られている。実際、アルレット・エルカイクは、ボーヴォワールが語る事を避けた人物の一人である。彼女がサルトルの生活の中で重要な役割を占めることについて完全な沈黙を守ることは、年代順の語りでは困難であったことであろう。テーマ別の章立て、言い換えればテーマの取捨選択という方法を取り込むことが、すべての事情を「語らない」ことを容易にしたのではないかと推測される。

サルトルや養女アルレット・エルカイク・サルトルと親交のあるミシェル・コンタは、ボーヴォワールの回想録における一人称複数「私たち」の語りは創造された伝説に近いものであるという見解を示している⁸⁾。少なくとも回想録執筆時、1950年代の終わりにはすでに存在しなくなっていたボーヴォワール、サルトルの二人の関係を、史料編纂者 *historiographe* としてのボーヴォワールが再生・再創造したと解釈できる。いずれにせよ、『決算のとき』においては、「私たち」と述べる部分は、それ以前の巻と比較して形式的なものにすぎないように思われる。je-narré と je-narrant との合流がなされた状況で、ボーヴォワールの挙げる年代順の語りの不都合な点に加えて、彼女とサルトルとの関係の変化が、語りの方法の選択に影響を及ぼしたと言えるのではないだろうか。

3. 日記の役割と『別れの儀式』の語り

ここで、回想録の中に時折挿入される日記という空間の役割について触れたい。ボーヴォワールは、マドレーヌ・シャプサルとのインタビューの中で「重大な状況において以外日記をつけることができない」と語っている⁹⁾。『女ざかり』の中の、開戦時である 1939 年の記述に「孤独と不安のうちに日記をつけはじめた」(FA, p. 433)とあり、同書にその抜粋が挿入されている。『或る戦後』の中では、サルトルとドロレス・ヴァネッティ(回想録では M. と呼ばれる女性)との恋愛の期間、不安を感じるボーヴォワールは日記をつけ、1946 年 4 月と 5 月の日記の抜粋を同書に載せている。また、アルジェリア戦争の最中の 1958 年の部分で、語り手は「所在なさや世間一般の不安とが、ちょうど、1940 年 9 月と同じように、また私に日記をつけさせた」(FC II, pp. 152-153)と語り、5 月から 11 月の日記の抜粋を第 9 章に組み込んでいる。

このように、『女ざかり』、『或る戦後』で時折挿入される日記の部分(すなわち、

戦時中や M.ードロレス・ヴァネッティの出現の時期、アルジェリア戦争) は、語り手の不安、焦燥の時期を示している。「生きるという事は明瞭に方向付けられた事業」(TCF, p. 10)であったと語り手が述懐しているように、常に未来への強い方向性を示す語りの中で、この日記の部分は日々の些細な出来事の記録に終始している。時間の流れは、突然、一日一日を単位とすることで緩やかになり、また、日記の中で言及されている出来事や人物についても、特に説明や前置きは見当たらない。日々の瑣末な記録をつけることで状況を打開する方法を探るような、一時中断・保留された状態が特徴である。自身の位置付け、人生の意味を明瞭に語ることのできない時期の語り手の動揺が仄見えるようだ。この日記の空間の中は、一人称複数「私たち」の語りではなく、一人称「私」の語りであることも言い添えたい。

さて、je-narré と je-narrant との合流がなされた『或る戦後』最終部以降、je-narré と je-narrant との間に違いがなく、「抗しがたく死に向かって滑って行く感じ」と述べる年齢の語り手に、もはや年代順の語りは必ずしも必要ではない。しかし、『決算のとき』の刊行から 10 年を経た『別れの儀式』では再び語り手は年代順を採用している。この巻の年代順の語りは 10 年間つけた日記に主として基づいている。

先ほど述べたように、ボーヴォワールは戦時のような特殊な状況や、迷い、動揺が生じた時期のみ日記をつけると証言している。晩年のサルトルが患う様々な症状を前に、ボーヴォワールは、普段つけることのない日記を重大な状況としてつけていたことが容易に推測される。著作、インタビュー、映画、デモへの参加、新聞の創刊といったサルトルの活動の記録の中に、サルトルの通院と病状の記録、習慣にしている食事とアルコールの摂取、季節や休暇に関する何の変哲もない日常生活の風景が実際に織り込まれている。

ところで、語り手は、『女ざかり』、『或る戦後』での日記の挿入部分同様、サルトルの周辺の人物を、彼らを巡る事情の説明、紹介をせずに登場させている¹⁰⁾。サルトルが定期的に会っている女性たち、ワンダ・コザキエヴィッチ、ミシェル・ヴィアン、アルレット・エルカイク、リリアーヌ・シエジェルが、あたかも回想録の読者にとって既知の人物であるかのように語っている。

彼の生活はかなり単調な繰り返しだった。古い女友達であるワンダ・K、ミシェル・ヴィアン、養女のアルレット・エルカイクと定期的に会い、アルレットのところ週 2 回泊まっていた。

Il menait une vie assez routinière. Il voyait régulièrement d'anciennes amies : Wanda K., Michèle Vian et sa fille adoptive Arlette Elkaïm chez qui il dormait deux nuits par semaine (CA, p. 18).

そしてサルトルがアルレット・エルカイクを養女に迎えた事情についてはまったく

言及していない。

また、もはや一人称複数「私たち」の語りとはいえない部分が多くを占めている。というのも、『別れの儀式』においては、それ以前の巻の自己物語世界の物語言説 *récit autodiégétique* から等質物語世界の物語言説 *récit homodiégétique* へ¹¹⁾、すなわち語り手「私」はもはや彼女の語る物語言説の主人公ではなく、サルトルを主人公とする物語へと移行しているからである。語り手は、サルトルの晩年の病状と日常を仔細に記録する観察者の位置へと後退している¹²⁾。このような語りの中で、サルトルを主人公として一步退いていた語り手が、それまでの巻の一人称複数「私たち」の語りと同様、はっきりと彼の意志と言い切っている部分も確かに見受けられるが、知的活動が衰え、半失明状態であるサルトルの考えを明言できている箇所は多くはない。『別れの儀式』では、語り手は専ら彼の意志を推測したり解釈したりしている。

先ほども述べたように、『女ざかり』、『或る戦後』に挿入される日記の部分は、その時間の流れの緩やかさと瑣末な内容でもって、明確な方向性を持つ語りの中で中絶・保留の空間を作り出していた。日記に基づく『別れの儀式』は、それ以前の巻に挿入された日記の部分と同様に、明確な方向・目標を見出せない語り手の苦悩と自問を内包している。

さらにこの作品では、『娘時代』、『女ざかり』、『或る戦後』で形成された自伝空間の解体が行われている。『別れの儀式』の中の空間では、それまでの巻で語られていなかったサルトルの周辺の女性達が登場したり、偽名が用いられていた人物の実名が明かされていたりする。親しい人の死を語ることは、自らの死を語ることに他ならない。自身の死後に出版されるであろう書簡、手帳、日記を見据えて、日記に基づく年代順という形式によって、それまでの回想録の中に作ってきた空間を少しずつ解体し、死後の出版物との橋渡しの空間を築いていることが分かる。

公的な色合いの強い回想録の、未来へと方向付けられた年代順の語りから、語りは変化し、主題別の形式からやがて日記に基づく形式に辿り着く。『別れの儀式』全体が、晩年のサルトルの病状を巡って、語り手の迷いと苦悩のにじむ内容になっていることは、日記を元にした形式からも読み取ることができる。

結論

以上、ボーヴォワールの回想録の語りの変遷を見てきた。48歳で始めた回想録の執筆は、巻を重ねていき、ボーヴォワールは70歳を過ぎるまで一連の回想録に取り組む結果となった。一見、『娘時代』の最終部でのサルトルとの出会いを経て、『女

ざかり』に始まる一人称複数「私たち」の語りは、最後の巻である『別れの儀式』まで強固に変わらないように見える。しかしながら、ポーヴォワールの回想録においては、それぞれの時期に必要な応じて語りの方が選択されており、その選択は語り手とサルトルとの関係を反映している。語りの形式は、年代順からテーマ別、日記に基づく形式へと変化し、やがて死を取り込んでいくことが分かる。

注

次の作品を以下のように略記する。

MJFR : Simone de BEAUVOIR, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Gallimard, Folio, 1958.

FA : Simone de BEAUVOIR, *La Force de l'âge*, Gallimard, Folio, 1960.

FC I : Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses I*, Gallimard, Folio, 1963.

FC II : Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses II*, Gallimard, Folio, 1963.

TCF : Simone de BEAUVOIR, *Tout compte fait*, Gallimard, Folio, 1972.

CA : Simone de BEAUVOIR, *La Cérémonie des adieux*, Gallimard, Folio, 1981.

なお、訳はそれぞれ「素行の良いある娘の回想」、「力のある年齢」、「事物の力」、「結局のところ」、「別れの儀式」となるが、本稿の記述はすでに刊行されている邦訳書名『娘時代』、『女ざかり』、『或る戦後』、『決算のとき』、『別れの儀式』に従う。

1) Philippe LEJEUNE, *Le Pacte autobiographique*, Seuil, coll. « Poétique », 1975, coll. « Points », 1996 参照。なお、『娘時代』の読書契約は *prière d'insérer* の中でなされている。「*En écrivant ces mémoires, j'ai soigneusement respecté la vérité et en ce qui me concerne je n'en ai rien omis*」。Éliane LECARME-TABONE, *Mémoires d'une jeune fille rangée de Simone de Beauvoir*, Gallimard, coll. « Foliothèque », 2000, p. 218.

2) Jacques LECARME, Éliane LECARME-TABONE, *L'Autobiographie*, A. Colin, 1997, (2^e édition 1999), p. 121 参照。

3) 拙論 *Quelques cas de la représentation des femmes autour de Jean-Paul Sartre dans les Mémoires de Simone de Beauvoir — la narration autobiographique et les éléments factuels —*, 『広島大学フランス文学研究』21, 2002年11月15日, pp. 29-44 を参照されたい。

4) 妹については *Lettres à Nelson Algren : un amour transatlantique : 1947-1964*, Gallimard, 1997, pp. 227-228、オルガについては同書の p. 173 参照。

5) Gérard GENETTE, *Figures III*, Seuil, coll. « Poétique », 1972, pp. 206-211. 訳語はジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』、花輪光、和泉涼一訳、書肆風の薔薇、

1985 を参照した。以下同様。

6) Jacques LECARME, Éliane LECARME-TABONE, *op. cit.* p. 228.

7) Liliane SIEGEL, *La Clandestine*, Maren Sell, 1998.

8) Michel CONTAT, « Sartre/Beauvoir, mythe et réalité d'un couple » in *Pour Sartre*, P.U.F., 2008.

9) « je ne suis pas capable de tenir des journaux intimes, sauf dans les grandes circonstances ». « Une interview de Simone de Beauvoir par Madeleine Chapsal » in Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *Les Écrits de Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1979, p. 390.

10) 例外は、ピエール・ヴィクトール（本名ベニ・レヴィ）である。ユダヤ系エジプト人であり、哲学を学んだことや、彼の政治思想を語り手は簡潔に説明し、『リベラシオン』紙にのったサルトルとヴィクトールの対談の抜粋を引用している。

11) Gérard GENETTE, *op. cit.*, pp. 251-259 参照。

12) 実際、語り手自身の活動についての記述は優先順位が低くなっている。拙論『別れの儀式』における日常の記述についての考察、『フランス文学』30（日本フランス語フランス文学会中国・四国支部）, 2015年3月31日, pp. 14-24 を参照されたい。

Sur les changements de procédés narratifs dans les *Mémoires* de Simone de Beauvoir

Yasue IKAZAKI

Simone de Beauvoir a entamé la rédaction de son autobiographie à l'âge de quarante-huit ans et y a travaillé jusqu'à soixante-dix ans passés. Cette continuité temporelle permet d'observer des changements dans les procédés narratifs employés : ordre chronologique, ordre thématique et récit fondé sur le principe du journal intime.

Les *Mémoires d'une jeune fille rangée* sont consacrés à l'adolescence du je-narré. À partir de *La Force de l'âge*, du fait de la présence de Sartre dans la vie de l'auteur, la narration passe à la première personne du pluriel. Au milieu de *La Force des choses*, le je-narré démarre la rédaction de ses *Mémoires* et y rejoint le je-narrant. L'ordre chronologique dans ces trois volumes est inséparable de cette jonction du je-narré et du je-narrant.

Dans *Tout compte fait*, la narratrice suspend le cours du temps de son autobiographie en procédant à une construction thématique du récit. Le je-narré et le je-narrant ne formant qu'un seul et même sujet, la narratrice ne reconnaît plus aucun changement dans sa vie et ne recourt plus alors à l'ordre chronologique. En outre, elle garde le silence sur les circonstances de l'adoption d'Arlette Elkaïm par Sartre. Ce procédé narratif, choisi pour aborder certains thèmes, lui permet de taire certains événements. La modification de sa relation avec Sartre motive sans doute la transition de l'ordre chronologique à celui, thématique, de *Tout compte fait*.

Or, Beauvoir ne tient de journal intime que « dans les grandes circonstances », pendant les guerres ou lors de l'apparition de M., puissante rivale. L'insertion d'extraits de son journal intime dans les *Mémoires* crée ainsi une suspension et témoigne à chaque fois d'un ébranlement de la conviction de la narratrice. *La Cérémonie des adieux* est elle aussi basée sur le journal de l'auteur. Tout en procédant de nouveau par ordre chronologique, ce récit est cependant entièrement consacré aux dernières années de Sartre. S'appuyant sur le journal intime, il fait entrevoir des remises en question de la narratrice face à l'altération de la santé de Sartre. Variant d'un tome à l'autre, les procédés narratifs préparent finalement la mort, en retraçant les dernières années de ce qui a été une part d'elle-même : son compagnon de vie.